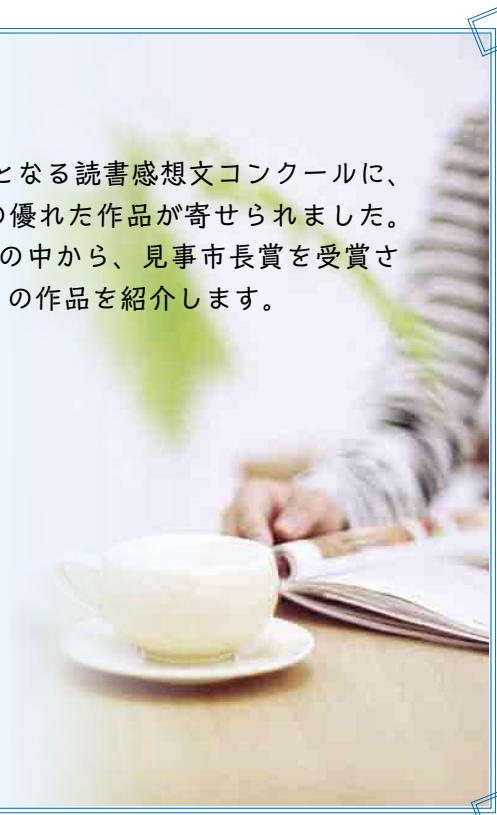
第10回

読書感想文コンクール

市長賞受賞作品紹介

10回目の節目となる読書感想文コンクールに、今回も数多くの優れた作品が寄せられました。応募総数76点の中から、見事市長賞を受賞された3名の方々の作品を紹介します。



「白い街あったかい雪」原発事故から学ぶ

阿蘇小学校5年
大倉　靖萌

ぼくは最初、「白い街」という題名の文字から、ファンタジーの本かなと思いました。しかし、読んでみると、ぼくが想像したものとは全くちがうものでした。この本はチェルノブイリ原発事故の放射能によって病気になった男の子、アンドレイ君の悲しい実話だったのです。

アンドレイ君が、病気と闘っているところでパイナップルのかんづめが登場しますが、ぼくはパイナップルのかんづめを開けた時に、「おいしそう」としか思いません。しかし、アンドレイ君のお母さんは、パイナップルのかんづめを開けたしゅん間に、パイナップルが育てられた所の太陽を思い浮かべたり、人間のあたたかさや命の重み、人と人とのきずなの大切さを感じたりしています。これは、食べられることにとても感謝しているからだと思います。ぼくは今、ご飯が食べられることが当たり前になっているので、食べ物に対して、ここまで感謝することがありませんでした。これをきっかけに、「食べる」ことについて考え、食べられることのありがたさを感じながら食事したいと思いました。

この本を読んでいくと、元気だったころのアンドレイ君はぼくとにているなと思いました。どんなところがにているかというと、勉強が大好きで、外で遊ぶことも大好き、というところです。アンドレイ君は病気になって、全ての事ができなくなってしまい、すごくつらかったと思います。それに、アンドレイ君の治りょうはとても大変だったと思います。ぼくの祖父も、同じような病気で亡くなりました。だから、祖父が治りょうしている様子を少しだけ覚えています。治りょうを受けている間はずっと、何ヶ月も病室から出られませんでした。食欲も体力もどんどん無くなりとてもつらそうでした。

アンドレイ君は、今のぼくと同じぐらいの年れいで病気になりました。なぜでしょうか。アンドレイ君はベラルーシという国で生まれました。小さいころに、となりの国のチェルノブイリで原発事故が起こった事を知らずに、毎日のようにお母さんと散歩していました。その中でアンドレイ君は、放射能におせんされた大気や雨にふれ、放射能を浴びてしまいました。しかも、原発事故が起きた事をベラルーシの人々はだれも知らなかったのです。ぼくは原発事故が起きた時、この事を一こくも早く世界へ伝え、周りの国の人たちに、外へ出てはいけないと呼びかけるべきだったと思います。もし、そういう対応をしていたら、原発事故のえいきょうをおさえることができ、たくさんの子ども達を救うことができたかもしれません。そして、アンドレイ君も、十四才という年れいで亡くなることもなかったかもしれません。そう考えると、原発事故を教えてくれなかっ

たことが残念でなりません。

このお話には、日本から来た看護士のやよいさんが登場します。やよいさんは、アンドレイ君のためにパイナップルを求めて歩き回ります。ベラルーシという国では、寒い時はマイナス二十度にもなるそうです。ぼくが住んでいる阿蘇は、寒くてもマイナス五～七度くらいだから、マイナス二十度の寒さを体験したことがありません。そんな寒さの中、出かけていくやよいさんはアンドレイ君のことを考え、元気を出してもらうためにパイナップルを食べさせたかったんだろうと思います。やよいさんは、やさしさに満ちあふれた人だと思います。このエピソードを通して、日本とベラルーシのように、国がちがっても助け合ったり、分かり合おうとしたり、みんなで一つになったりできるのだということを強く感じました。だからぼくは思います。世界がもっと仲良くなれば、病気になっても助かる人が増えるんじゃないかと。世界がそうなったらとてもうれしいです。ぼくもやよいさんのように、やさしい人でありたいと思います。

もう一つ最後に、この本を読んで気付いた事があります。アンドレイ君のお母さんは病気で息子を失ってしまい、悲しくて仕方がないはずなのに、やよいさんや、治りょうしてくれた日本人ドクターに対して感謝の気持ちを伝えていました。ぼくはその行動に胸を打たれました。悲しみの中でも感謝する事ができると分かりました。とてもすごいと思いました。

ぼくはこの本を読んで元気であること、食べられることのありがたさや人の優しさやきずなの大切さを感じました。また、原子力発電所の事故で放射能のひ害が出ていることは日本は他人事ではありません。なぜなら、福島で事故が起きているからです。だから、身近に起きた出来事として、頭に入れておきたいです。この本は、遠い国の遠い話だと思ったけど学ぶことがたくさんありました。それは全て、ぼくの身近な生活に生かせるものばかりでした。

●ブックデータ

《書籍名》
白い街あったかい雪
《著者》
鎌田 實

●審査講評　内容をよく読みとり、自分のことばできちんと感想が述べられています。書き出しも素晴らしく、次第に一番伝えたいことへと感想が集約されていく点など、五年生として完成度の高いものとなっています。

「武器より一冊の本をください」

阿蘇中学校3年
増山　純也

皆さんは〝マララ・ユスフザイ〟という人を知っていますか？恐らくニュース等で、名前だけでも知っている人が多くいることでしょう。

二〇一二年十月九日、十五歳の少女、マララさんが通学途中に銃撃にあいました。この少女はただただ、勉強がしたいと願う人でした。

マララさんが暮らしているパキスタンでは、今もなお、内戦が続いています。その内戦の一因でもあるタリバンと呼ばれる人々の行動は僕にとって「怖い」の一言です。例えば、自分たちの作った決まりを破ったり、それに背いたりしたら、平気で人を殺したりするのです。その決まりもとても不合理で「音楽関連の店やしせつは三日以内に業務を変更しろ」だとか「女子は学校へ行ってはいけない」など、そういったものばかりです。警察もタリバンには逆らえず頼れるものも何もない。このような生活を想像できますか？また、そのような状況におかれてタリバンに少しでも反抗することができますか？少なくとも僕にはそのような勇気はありません。しかしマララさんはそのタリバンへと勇気を出して立ち向かっていったのです。しかしその結果、通学中銃で撃たれてしまいました。不幸中の幸いとでもいうのでしょうか、左の側頭部を撃たれたのにも関わらずマララさんは、目を覚ましたのです。

「親愛なる兄弟姉妹の皆さん、わたしは誰も敵だとは思っていません。ましてや、タリバンその他のテロ集団に対する個人的な復讐心もありません。わたしはあらゆる子どもの教育を受ける権利を訴えているのです。タリバンやすべてのテロリスト、過激派の子どもたちにも教育を受けてほしいと思っています。」

「親愛なる兄弟姉妹の皆さん、わたしたちはあらゆる子どもの輝ける未来のために、

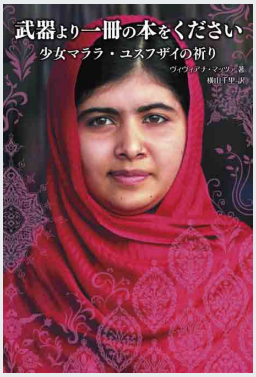
学校と教育を求めます。わたしたちは平和と教育を目指す旅を続けてゆきます。誰もわたしたちを止めることはできません。わたしたちは自らの権利を求めて声を上げ、その声を通じて変化をもたらします。わたしたちは言葉の力と強さを信じています。わたしたちの言葉で世界を変えることができます。わたしたちはともに、団結して教育を求めているからです。その目的を達成するために、知識という武器を装備し、連帯と団結という盾で身を守ってゆこうではありませんか。」これらはマララさんが銃撃から復活して国連で演説した内容の一部です。これを読んで僕は感銘を受けました。なぜなら、自分の命を奪おうとした人々に対する復讐心がなければ、その人たちにまで教育を受けさせ、世界を平和にしていこうと考えているからです。また、武力には武力でという考えは全くなく、教育によって武力を解決していこうという考えまでもが伝わってきます。僕は、本当にマララさんは、偉大な方だと思います。

さて、今、日本では子供たちは平和に生活をして、普通にあたり前のこととして教育を受けています。しかし、このマララさんが住む国のような場所が数多く存在していることを忘れてはいけないと思います。そして、今自分があたり前に教育を受けられていることに感謝して日常生活を送っていくべきだと思います。

また、マララさんが演説した中には次のような一文もあります。「わたしたちは先進国に対し、開発途上地域の女児の教育機会拡大を支援するよう呼びかけます。」今、先進国と呼ばれているこの日本では、この呼びかけに応えることはできているのでしょうか。募金活動などそういったものは、ちらほら見られますが、それは単に任意参加ということで、大きな効果はあまりないような気がします。マララさんは「先進国」という〝国〟全体に呼びかけているのではないでしょうか。豊かすぎると言っていいほどのこの日本ではもっとそういった活動に国全体で取り組んでいってもいいのではないでしょうか。

この本を読んでいかに自分が世界の現状を知らないのか、知ろうとしていないのかがひしひしと伝わってきました。ただ、他にももっと現状を知らずに、知ろうとせずにあたり前のこととして普段の生活を送っている人が大勢いると思います。同じ地球上の人間ならばこの状態から目を背けてはいけないと僕は思います。

●ブックデータ



《書籍名》
武器より一冊の本をください　少女マララ・ユスフザイの祈り
《著者》
ヴィヴィアナ・マッツァ

●審査講評　やや引用の部分が長いきらいはありますが感想の根拠ははっきりと示されており、筆者と同年代であるマララさんへの尊敬の念や平和の中で十分な教育が受けられることへの思いなどが、文章の構成の上にも有効に生かされています。

心に届くラヴレター

阿蘇中央高校2年
安方　菜々美

この『届かなかったラヴレター　百四通の涙』という本に興味を持ったきっかけとは、題名にあるラヴレターという言葉から中・高生の恋愛に関する手紙が書いてある本なのかなと想像したからです。少し胸がキュンとなるような本を読んで、せつない思いを体験したかったのかもしれません。

しかしいざ読み進めていくと、いろんな世代の人が書いたラブレターに出会うことになりました。子どもの事や夫から妻、妻から夫への手紙など私の思いを超えた様々な視点のラブレターを読む事が出来ました。

その中でも私に最も強い印象を与えたのは子どもから産み育ててくれた家族に宛てた一通のラブレターでした。いつもはなかなか言えない家族に対する感謝の言葉「ありがとう」という思いが大切につ

づられており、読んでいると自分が生きてきた十七年間の中で家族が自分をどれだけ優しく、そして愛してくれているかを感じるとともに、怒られたこと、優しくされたこと、助けてくれたことなど、自分自身の経験を思い出していくうちに涙が溢れてきて止めることができないほどでした。

ある時、ちょっとした事で母と喧嘩になってしまい、その時に「自分は愛されてないんだ」と一番言ってはいけない事を、言ってしまった事がありました。母は私の目から見ても深く悲しみ、母が泣く姿を見て私には後悔だけが残りました。

そのような出来事もあり、この本を見て改めて家族の大切さというものを実感しました。これは私達家族のものではないけれど、私達の思いを代弁してくれているような気持ちにさせてくれるのです。なかなか家族に対して素直になれていない人など、ちょっとした行き違いなどであまり家族と話せていない人など、少しでも読んでみるといつも

は言えない「ありがとう」という言葉を素直に伝えられるきっかけになるのではないかと思うのです。

私自身このことがきっかけとなり、「ありがとう」という言葉を忘れずに、家族、仲間を大切にしていこうと強く思うようになりました。この本に出会えたおかげです。

又、亡くなった曾祖母や、遠くにいる兄達のことなどへの感謝の思いも再認識しました。この本にはそういった、誰かを大切に思う気持ちが沢山溢れて、忘れてはならない思いを呼び起こしてくれます。

この本のラヴレターは全部その主に届いていない物ばかりです。ですが、その人に届かなくてもこうして今、読んでいる私達に伝え、伝わる思いもあるのだとこの本で知る事が出来ました。

生きている中で「ありがとう」という言葉はいい古るされ、何度でも使われている言葉ではありますが、そのたった五文字だけで多くの人の人生が続いているんだろうなと

思うと、「ありがとう」という言葉にはもの凄いパワーが秘められているのだと思うようになりました。誰に対してもその「ありがとう」の言葉を忘れずに、これからの道を歩んでいきたいと強く思うようになりました。

私は小学校の頃から剣道をやっており、日本一になるという夢があります。ですが、小学校の頃は好きで剣道をやっていなかった為、何度もやめたいと思うことがありました。でも今こうして諦めず剣道をやってこられているのは、どんな時でも家族が応援し、支えてくれているからです。そんないつもそばで支えてくれている家族に、仲間と日本一になって感謝の気持ちを伝えることが今家族に対して出来る最大の親孝行だと思っています。その夢を叶えるためには沢山の犠牲を払い高くて分厚い壁を乗り越えなければなりません。ですが、家族の喜ぶ顔を見るために、感謝の気持ちを忘れず一生懸命頑張って、夢を叶えて「ありがとう」と伝えたいです。

最後に十七歳の自分へ自分を励ますラブレターを書き遺します。

十七歳のキミへ

今キミには大きな大きな夢があるね。

その夢を持つ事が出来ているのは、どんな時でもそばにいてキミの一番の味方でいてくれている家族がいるからだね。

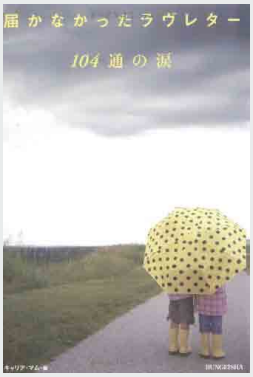
今まで一緒に暮らしてきたからそれがあたり前だと思っていた。だけど今離れてみてその大切さを痛いほど感じるね。

だから、大好きな家族に必ず一番輝く金メダル見せるんだよ。それは十七歳のキミにしか出来ない事なんだ。必ずテッペンにたって伝えるんだよ。「ありがとう。」って。

十七歳の私より。

このラブレターを胸に刻み、自分の道をひたすらに進んでいきます。

●ブックデータ



《書籍名》
届かなかったラヴレター
104通の涙
《編さん》
キャリア・マム

●審査講評「ありがとう」という、ありふれていて深みのある言葉を通して、築いていこうとする家族や、周囲と自分とのつながりなどが、十七歳らしく美しい気持ちで綴られ、文章の構成もうまく、表記の面でも行き届いていました。